

令和元年6月6日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K01658

研究課題名(和文) スポーツが提起する社会的価値観のネットワーク構造

研究課題名(英文) Network structure of societal human value in sport

研究代表者

佐々木 康 (Sasaki, Koh)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授

研究者番号：00183377

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：スポーツが社会に伝える社会的価値観構造をロキーチモデル、希望学、時間的展望研究、存在脅威管理論等から策定したモデルで検証した。研究プロトコルは妥当性、信頼性、客観性がチェックされた。存在脅威は人々がリスクといかに直面するかを解釈する方法を提供する。それは脅威的側面としてだけでなく、肯定的な時間的展望も示すものであり、不安に対する緩衝機能でもある。スポーツで認識される価値観は社会共通の存在論的は使命を反映するのかもしれない。人間存在は生物学的価値と存在論的価値の動的均衡で存立する。人々は複雑化する環境社会に適応するため、単一の価値ではなく、自由に選択され複合化された多くの価値で生きる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スポーツの社会的価値観の構造解明は、複雑化する環境社会にあって人々の存在論的使命を克明に記述する。被災後の孤高と誇りのアスリートや指導者の義援活動は、真のリーダーシップを体現することを実証的に検証するものである。スポーツの価値は、氾濫する情報社会のなかで、触覚的コミュニケーション社会の有用性をしめるものである。

研究成果の概要(英文)：The current study examined the societal human value structure of sports with a model formulated from the Rokeach model, hope theory, temporal perspective research, terror management theory, etc. The research protocol was checked for validity, reliability and objectivity. Presence threats provide a way to interpret how people face risks. It is not only a threatening aspect but it also shows a positive temporal perspective and is a buffer against anxiety. Values recognized in sports may reflect the common ontology social mission. Human beings exist in a dynamic balance of biological and ontological values. In order to adapt to the increasingly complex environmental society, people could live with not a single value but with many freely selected and composite values.

研究分野：スポーツ経営学

キーワード：ネットワーク分析 価値観 ネットワーク中心性 コレスポネンス分析

1. 研究開始当初の背景

社会経営学とスポーツ経営学との融合

日本社会に千年に一度という大打撃をもたらす続ける震災により、国民の次代への希望が阻喪しつつある。きしくも『希望学』(2004)や『時間的展望研究』(2007)という社会経営の重要な課題が出自し始めたのは2000年以降である。その論点は安易な楽観主義ではなく、深刻な社会停滞の中で、次代と正面から対座する肯定的思考の構造を丹念に解きほぐしてゆこうという視点である。

2. 研究の目的

スポーツと社会をつなぐ『多様な価値観のネットワーク構造』の実証的検討。『価値観』は人々が葛藤と対処し厳しい現実社会に生き抜く叡智を形成する理念である。2011年3月、我国を襲った東日本大震災の人的組織的損失規模は想定の域をはるかに超え、スポーツ活動等の自粛観を惹起した。一方で直後からスポーツ界は地域救済への様々な義援活動を展開する。本研究は、新しい社会学・経営学理論である『希望学』や『時間展望研究』などに学びつつスポーツの柔軟で複層的な価値観構造をネットワーク理論という生態系・生命脳科学系でも援用される独自の分析手法を活用して理解するものである。人々が極限状況から次代へ挑む意志と動機をいかに見出しうるのか。最新経営理論の援用により、次代のスポーツ価値観経営基軸を考察する事が本研究の目的である。

3. 研究の方法

ロキーチの価値観研究すなわち『最終価値』18項目および『手段価値』18項目の構成を、希望学、時間的展望、存在脅威論等から整備したものを使用した。研究のプロトコルおよび結果に関する信頼性、妥当性、客観性は検証された。被調査者は項目の優先順位を序列化することで価値観に対する段階構造と総合的關係性を示すことになる。「スポーツは社会にどのような価値観を伝えているのか?」という問いを内外学生、指導者層に問うものである。さらにそれらの関係構造はネットワーク中心性分析、コレスポネンス分析で詳解する。

4. 研究成果

(1) 価値観という理念様式を考察するに当たり『希望学』や『時間的展望研究』等の社会経営論点に加えスポーツに関する社会心理理論のなかで「人々は何故、極限状況でスポーツに挑むか」を考察する『存在論的脅威理論』やソーシャルネットワーク理論等も援用した。心身に危険を及ぼす活動は生命の有限性を知ることであるが、そこに挑む心理は『ある種の文化』的価値観への接近により、改めて生命の有限性を知り得るといふ、両義的認識が作用するのかもしれないと考察した。スポーツに挑む『孤高と誇りのアスリート』(Proud lonely athletes, Sasaki, 2015)は次代への希望を実現しようと挑み続ける、勇氣ある存在として、社会的資本となりうるのかもしれない。

(2) 震災後という特殊な状況下ではあるが、そこに認識されるスポーツの社会的価値観構造の解明は、社会・地域・教育等複合的環境に関わる公的動因として、今後追求すべき課題と思われる。あるケースでは最終価値の順位が高い順に、1位の『達成感 絶えざる献身』に続き2位に『国』が挙げられた。公的動因に關与する『国』、政府及び統括競技団体の協力を仰ぎ、更に被災地を含む地域社会も対象として拡大することでスポーツの社会的価値についてのエビデンス蓄積が更に図られると考える。人々がスポーツ社会にどのような価値観を求め、ひいては何が欠如していると認識しているを紐解く端緒になると考える。対象を拡大する際には、これまで用いられてきた社会的価値項目について、スポーツ領域との関連を鑑みて至適に応用され得るのかの項目(言語)の妥当性についても対象(内外学生格差、年齢層格差等)に応じて検討する。

(3) 本研究は現代社会経営学と連携した、スポーツ経営領域における『経営理念』に關与する。すなわちそこに現

代のスポーツが、次代の『希望』に向かう行動として、肯定的な『時間的展望』を見出すひとつの社会動因たるという、実践社会に立脚する存在であることを指し示すという挑戦的意義を持っている。スポーツの科学的進展は、成果を導き出すために世界の最新情報を学びつつ長時間の厳しい強化を独自に開発するというまさに『経営理念』が必要であり、そこに支える社会への肯定的思考、『市民の誇り』や『信念体系』等の社会的・人的資源に関わる価値観との議論も呼び起こすであろう。『価値観』研究の多義性 (Rokeach,1973)は『社会的』(Interpersonal)か『個人的』(Intrapersonal)かのいずれをも包括した価値の複層性が示唆されるが、本研究では、その理解のために比較的新しい理論であるソーシャルネットワーク分析手法を援用し、複層構造を断層的かつ視覚的に表現するグラフ理論を活用するという学術的特色を持つ。他者関係性を前提としつつ並列して自己内にある『義援』や『心的調和』などの心理ベクトルも考察された。価値観のネットワーク構造の議論では、多様な価値観がどのような段階的集合構造(クラスター)を有するか、あるいは中心的価値観グループ構造(中心性)、さらにはネットワーク間の相違構造(類似性)等の統合的關係性が深耕できる可能性を示唆した。また価値観項目を事前設定する手法の限界として、自由記述・意思を阻害している可能性についても十分な認識が必要であり、ケース蓄積と並行し、項目・用語使用の妥当性の検証も引き続き行う。今後、スポーツの価値観ネットワーク研究は政策価値分析、言語価値分析、戦術価値分析などにも応用・波及が期待される。

- (4) 本研究に於いてはスポーツ活動の中で、心身の極限に挑む状況設定として、いわゆる競技スポーツに焦点を絞り検討されたものである。項目の検討のため、スポーツ政策、競技組織の強化・普及の有識者会議を行い、実践および施策に適合する価値観のディスコース(文脈)を明らかにし、並行してデータ収集を内外で行った。
- (5) 本研究方法のイノベティブな特徴としては、社会や生命神経系のネットワーク(例えば脳内神経ネットワークについては Xi-Nian(2012)など)の理解に用いられる、力学量をモデル化(Bonacich and Lloyd,2004; Fruchterman and Reingold, 1991)し、複数項目間の関与構造を連結化(グラフ理論)するネットワーク分析を援用することで、価値空間構造の描写を試行した。

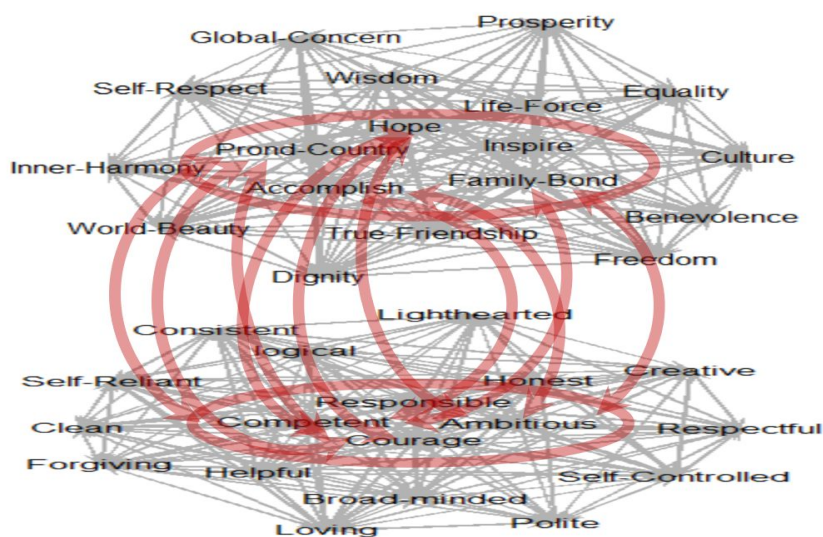


Figure 1. Mapping of terminal and instrumental values assigned to benevolent sports activities after the 2011 disaster in Japan. High centrality items in terminal value network were intimately related to those in instrumental value network.

- (6) スポーツ価値観構の順位構造に加えて、共通因子の抽出等、多変量解析アプローチからも解釈を試行する。さら

に構造理解の為の視覚化についても多次元構造を理解しやすい形式で提示する手法を提起する。極限状況に挑む実践的価値観については、本研究者が進めている、『競技組織生成』のフィールド調査（2007,2010）や『存在論的脅威理論』（terror management theory）研究（2010）を援用することでスポーツと社会帰属といった関係構造が浮き彫りにできると考える。

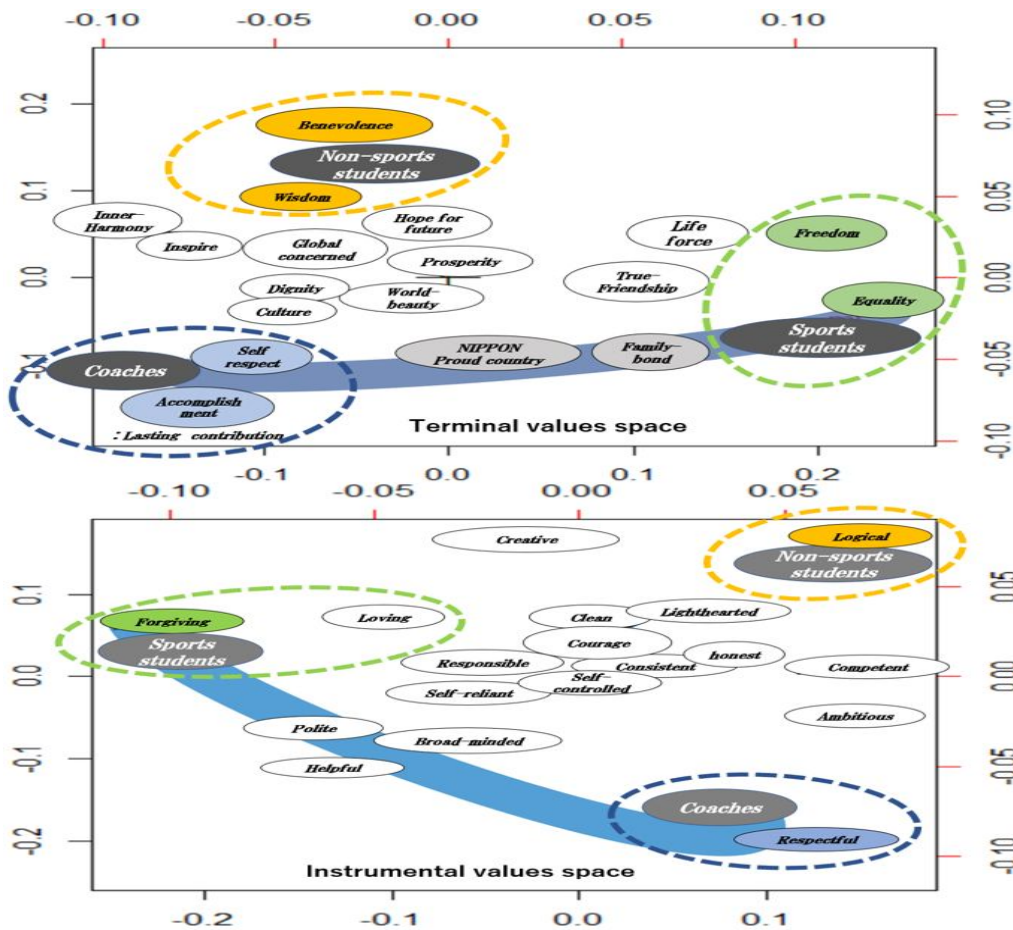


Figure 2. The space difference or similarity of the societal human values between coaches, sport students and non sport students as shown by centering resonance analysis (A: societal terminal values: B: societal instrumental values)

5. 主な発表論文等

雑誌論文

1. K.SASAKI, T.Yamamoto, I.Watanabe, T.Katsuta, I.Kono, Athletes' pride bridge; Network centrality analysis to clarify the societal values of sports after the 2011 disaster in Japan. *Advances in social science research Journal*, 6(2), 440-50, 2019. DOI: [10.14738/assrj.62.6243](https://doi.org/10.14738/assrj.62.6243)
2. 佐々木康, 古田仁志, 古川拓生, 渡辺一郎, 山本巧, 上野裕一, 下園博信, 村上純, 寺田泰人, 早坂一成, 中本光彦, 梶山俊仁, 大塚道太, 大勝志津穂, 安井直史, 浜野俊平, 中島正太, 戸田尊, 薫田真広, 岩淵健輔, 大村武則, 中山光行, 勝田隆, 河野一郎, ラグビーゲーム分岐点となったプレイのネットワーク構造, *ラグビー科学研究*, 30(1), 3-9, 2019.
3. Koh Sasaki, Takumi Yamamoto, Masahiko Miyao, Takashi Katsuta, Ichiro Kono, Network centrality analysis to determine the tactical leader of a sports team. *International Journal of Performance Analysis in Sport*, 17(6), 822-831, 2017.11.20. doi.org/10.1080/24748668.2017.1402283

4. 佐々木康,中島正太,山本巧,古田仁志,古川拓生,大村武則,岩淵健輔,薫田真広,ラグビー15 人制パフォーマンス分析:主に防御構造. *バイオメカニクス研究*, 21(1),19-24, 2017
5. 梶山俊仁 佐々木康 寺田泰人 山本巧 吉田浩二 高津浩彰 武石健哉 小泉和也 中本光彦 大塚道太 小柳竜太 2017 年ワールドラグビー世界的試験実施ルールの検証—2016 年度及び 2017 年度の海外,国内のゲームにおけるスクラムに着目して—, *ラグビー科学研究*,30(1),10-17,2019.
6. 佐々木康,中山光行,薫田真広,大村武則,岩淵健輔,下園博信,村上純,渡辺一郎,山本巧,勝田隆,河野一郎,ラグビージャパン 2017 相手強豪国のトライ構造,*ラグビー科学研究*,29(1),3-8,2018.
7. 下園博信,村上純,佐々木康,古川拓生,山本巧,榎崎兼司,萩原悟一,7 人制ラグビーの勝敗に関わるプレーの特徴について~リオデジャネイロオリンピック 7 人制ラグビー日本代表チームを対象にして,*ラグビー科学研究*,29(1),27 - 32,2018.
8. 佐々木康,渡辺一郎,山本巧,山下修平,田中彩乃,奥脇透,2016JRFU 女子ラグビー傷害状況,*ラグビー科学研究*,28(1),56-60, 2017.
9. 佐々木康,薫田真広,岩淵健輔,山本巧,上野裕一,岸川剛之,ラグビーワールドカップ 2015 ショートテクニカルレポート,*ラグビー科学研究*,27(1),3-7, 2016.

図書

0 件

研究成果による産業財産権の出願・取得状況

0 件

科研機を使用して開催した国際研究集会

0 件

本研究に関連して実施した国際共同研究

0 件

その他

ホームページ

<https://sites.google.com/view/kohsasakinuhtc/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>